

席をゆずらなかつたローザは、警察に逮捕されてしまったのです。

ローザは、何も悪いことをしていないのに、黒人だからというだけの理由で、差別され逮捕されて、とてもかわいそうだと思います。警察が罪もない人を逮捕してもいいのかわかりました。それから、ローザは強い人だなどと思いました。自分はまちがっていない、まちがった事にはしたがわれないとどうどうとしていたからです。もし私だったら、こわくて、すぐに席を立ってしまおうと思います。

ローザが逮捕された事を知って、仲間の黒人の人たちは、みんなで集まり決めました。いつもびくびくしてばかりではダメ、不平等をたたため、ローザに続こうと。そしてみんなで「バスに乗らずに歩きましょう」というピラをつくりました。

これを読んだ他の黒人たちは、いっしょにたたかう気持ちになりました。ローザの勇気ある行動が、みんなの気持ちを動かしたんだな、すごいなと思いました。

私も、みんながんばれば、差別なんかには負けるなど、応えんしたい気持ちになりました。それから人びとは、雨の日もかんかん照りの日も朝も夜もバスに乗らず歩きました。そして、この人たちが歩き続けられるようにと、国じゅうから、くつやコートやお金を送られてきたそうです。

私と同じように応えんしたい、と思う人がいっぱいいて、黒人も、がんばって差別をなくそうとしたかいがあつたんじゃないかなと思いました。

ローザが逮捕されてから一年がたち、さいばん所は、「バスの席を人種によって分けるのは違法だ」という判決をくだしました。

私は本当によかつたなと思いました。みんなで力を合わせて行動を起こしたか

一家四人、走る家族になった。私は、走ることを通じて家族以外にも、一緒に楽しみ競い合う大切な仲間ができた。

この本の主人公である和希や、その走る仲間達は短距離走者だ。それぞれが自分を高めようと努力し、時には走ることにつまずき悩みながらも精一杯頑張っている。私は長距離走者だから少しちがう所もあるが、走ることに対しての熱い思いは同じだと思ふ。

自分にとって「走る」とはどういう事かを考える。好きな事だけど、時には乗り越えないうと先に進めない大きな壁もある。一年を通して三キロ、五キロ、ハーフマラソン等、様々なレースに参加しているが、どれもちがう様でちがわぬ。途中、苦しくて弱音を吐きそうなる時も決してあきらめない。自分のできる限りの力をふりしぼってゴールを目指す。そのゴールした時のしゅん間が、とても気持ちいい。苦しかった事も一気にふき飛ばす感じがする。そして、頑張った！走ってよかつた！という充実した満足した気持ち一杯になる。ゴールラインでの思いはいつも同じだ。だから私は走ることを続けていくのだと思ふ。楽しんで、苦しんで、競い

ら、こういう結果につながったんだと思ひます。

みんなで協力しあう事ってとても大事な事なんだなと思ひました。

世界には、まだまだ差別がたくさんあります。なので、みんなで協力して差別がなくなつて、みんな仲良くくらせればいいと思ひます。

ジョイ・アダムソン

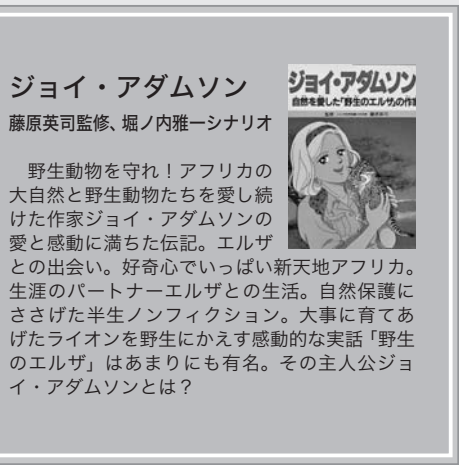
本川根小学校五年

栗田紗江



私が、この本を読もうと思つたわけは、動物にとっても興味があるからです。

ジョイアダムソンは、野生の王国アフリカのケニヤでもうじゅうのライオンの子を育て、そして大人になつたライオンをまた、野



ジョイ・アダムソン

藤原英司監修、堀ノ内雅一シナリオ

野生動物を守れ！アフリカの大自然と野生動物たちを愛し続けた作家ジョイ・アダムソンの愛と感動に満ちた伝記。エルザとの出会い。好奇心でいっぱい新天地アフリカ。生涯のパートナーエルザとの生活。自然保護にささげた半生ノンフィクション。大事に育てあげたライオンを野生にかえす感動的な実話「野生のエルザ」はあまりにも有名。その主人公ジョイ・アダムソンとは？

合つて、自分に勝つ。走ること、それは私にとって自分を大きく強くすることのできるスポーツなのだと思ふ。

和希にとつての走ることは、「熱い、あばれまわりたいような激しいものが、体の底からわき上がってくる」という感じらしい。短距離はたつた十数秒で勝負が決まる世界だから私とはちがう思ひなんだと思ふ。でも走る事の中で、目標を持ち、努力をして成果をあげる事はやっぱり同じ。みんなそうやって少しずつ自己ベストの更新に向けて頑張っているはずだ。そしてそれは走ることでだけでなく、他のスポーツや、すべてのことに言えるのだと私は思ふ。

母から教わつた、元マラソン選手の谷口浩美さんの言葉で、「目標なきもの努力なし。努力なきもの成果なし。成果なきもの感動なし」という名言がある。初めて聞いた時、まさにその通りだ！と思つた。私にとつての走るこの意味と、ものすごく通じ合う気がした。それ以来、走ることでなく他のことにおいても、自分の中で大切な教えとなつている。これからもこの言葉を胸に、一つ一つ、目の前の目標に向かって頑張つて生きたいと思ふ。

天馬のように走れ

中川根中学校一年

山本美優



書道ってなに？川村驥山って誰？歴史上

生に戻したそうです。

ライオンは、肉食動物でシマウマや牛などの動物の肉を食べ人間もおそうとても強い動物です。

しかし、ジョイアダムソンとライオンの子「エルザ」は、まるで人間の親子のようにとても仲良くなれたのです。

それは、ジョイアダムソンがこわがらず優しくエルザを育てたからだと思ひます。それがエルザにもわかつたのだと思ひます。私の家では、犬や金魚、コイなどを飼つています。

犬のレオはとても甘えんぼうで、いつも私の方の中にもぐりこんできます。「レオ、おいでー」と言えば、来てくれるし、「おすわりー」と言うと、おすわりしてくれます。そんなレオは、お散歩が大好き。いつも散歩の時間がくると、大きくしっぽをふり「早く行こうよ」と言うようにほえます。

金魚は、夏休みに友達に二匹もらひ育てることにしました。だけど、金魚を飼つてから五日目に一匹死んでしまいました。とてもかわいそうなことをしたなと反省しました。私は、それから、金魚のことを図かんやインターネットなどで調べました。えさの量、金魚の病気、水そうの中のかんきょう、水温などを調べました。

私は、早速水そうの水をきれいにする赤玉を入れて、水草も入れ、さん素を送るようになりました。水のバイキンを殺すため塩を入れたり、えさのやりすぎにも注意したりしました。

その後、祭りの夜店の金魚すくい金魚を取り、今は七匹の金魚がいます。ぜつ対に死なないようにしたいと思ひます。

動物は私たちのように言葉を使えないけれど人間が言っていることは、しっかりわ

の人物らしいけど、そんな人のこと教わつた事ないよ。ん？習字の筆を天にかざして空に何か書いている。がっ、なんて書いているのか読めないよっ！いったい何なんだこの人は？それが、この本を書店です。表紙のイラストを見た時の私の第一印象でした。そして、私はむしようにこの変てこな人のことを知りたくなつたのです。

川村驥山の本当の名前は慎一郎というのだそうです。明治十五年に静岡県久我山というところで生まれました。久我山は現在の袋井市です。幼い慎一郎は、漢学を勉強していた父親から中国の学問や書道を教え込まれました。父親が四十歳のときにできた子供だったので、自分が老いてしまわぬうちになんと自立してほしいとの願ひからとても熱心に教えたそうです。五歳のときには「大丈夫」という字を立派に書いて、父親にとつてもほめられました。それを見ると、とても五歳の子供が書いた字のように私には見えません。きつと、書道をきわめるために生まれてきた人なんだと思ひます。それで、書聖というのは書道の達人のことなのだ、私は気がつきました。

慎一郎が小学校に入ると、算数や国語もよくできて、先生が書けない字まで書けるので大騒ぎになります。それで当時の制度で、二年間で四年生を卒業してしまつたのです。そして、太田竹城という人に入門して字というものがただ物事を記録したり手紙を書くためだけから、楷書、行書、草書と発達して心を表現する「書」という芸術にまでなつたことなどが、思ひつきで書かれているのではありません。そういう書き方がちゃんとあるのだということがよく分かりました。

慎一郎は十歳で松島十湖という俳人から二葉という号をもらひ、静岡県知事の頼みで

かっていると思ひます。

動物といっしょにいるといやなことわすれて、とても楽しくなつていやすれます。だから私は、動物が大好きです。

私が、犬のレオや金魚をかわいと思う心がきつと伝わっているのだということが、ジョイアダムソンとエルザの本を読みわかりました。

もし私が動物たちのめんどろをみなかつたり、かわいくないと思えば、こんなに私には、なつてくれないでしょう。

動物も、もしかしたら植物も、人間の言葉がぜつ対にわかると思ひます。これからも私は、動物たちにやさしくしてもっともっと仲良くなりたいと思ひます。

そして、しょう来動物にかかわる仕事したいと思ひます。

ゴールライン

本川根小学校六年

前川裕音



走ることが日常生活の一部になつている私。たまにこんな事を思ふ。「走ることは大好きだけど、何で私は走っているんだっけ？」それは兄と母の影響で始めた事だつた。と言うか、気付いたら走っていたという感じかな？走ろう会や駅伝練習。兄と母と一緒に参加しているうちに、いつのまにか私も走ることになつていった。それにつられてか父まで走る人になつた。今では

県内の小学校を回り書道を教えたなんて、すごいなあと思ひました。それを頼む大人もすごいと思ひます。そうやって才能を伸ばしてくれる人たちにも恵まれたから書聖にもなれたのだと思ひます。十五歳で書家として武者修行に出たというのにも感心しました。今なら、まだ私たちと同じ中学生です。しかも、師匠や親から強制されたりとかアドバイスされたりとかではなくて、自分から父親に決意を話したというのですから、自分がこれからどう生きていくか、そしてどうしたいかを自分で真剣に取り組んだのだと私は思ひます。私のほうは、中学校で勉強したり部活をしたり、でも、まだまだ将来のことは想像できません。でも、どういふことが自分に向いているのかぐらいは、そろそろ探していけないといけなかなあと思ひました。

その後、二葉は京都で修行するうちに、美しい風景を見たり、すぐれた人たちと親しくなつたり、絵や音楽にふれたり、中国の古典を学んだりするうちにどんどん書が上達していきます。そして書道の展覧会などでも有名になり、もっと多くの人の影響を受けた

天馬のように走れ

書聖・川村驥山物語
那須田稔著



静岡県袋井市の油山寺門前に生まれた川村驥山。厳しい父の指導を受け入れ、母の愛に包まれて育ちました。神童といわれながら少しもおごることなく真摯に学び、本を読むこと、書をかくことを通して成長していく川村驥山の姿を描きます。第54回青少年読書感想文全国コンクール課題図書。